海がつなぐ世界―オセアニア

渡辺　文（大学グローバル地域文化学部助教）

はじめに

日本という場所から眺めるとき、オセアニアといっても多くを想像できる人はあまりいないかもしれない。オーストラリア、ニュージーランド、パプアニューギニアという例外を除けば、土地面積がきわめて小規模な島々から成り、地下資源に乏しく、大陸から隔絶されているだけでなく、海上に散在する島々のあいだに交通網を整備することすら難しい。これほど人・モノ・情報の移動が活発化した現在でも、オセアニアの島々といえば、どこか遠くの楽園リゾートという漠然としたイメージに終始することもめずらしくない。

私は人類学という分野から、オセアニア島嶼地域の文化や芸術（伝統的ものづくりから現代アートまで）の研究をしている。とりわけフィジーでは、現地の人々と共に暮らし、２００４年から数えると通算3年以上にわたる長期フィールドワークをおこない、その独特の世界を学んできた。このエッセイでは具体的な生活世界や、「海でつながれた島々」という、オセアニアのエッセンスとも思われる世界観を紹介し、その魅力を多少なりとも伝えられればと思う。

フィジー、フーランガ島へ

２００６年、私はフーランガ島というフィジーの南東部にある小さな珊瑚礁島で、島民とともに暮らしながら、島間の贈与交換体系や、カヌー製作など伝統的な技術の調査をしていた。本島（ヴィチ・レヴ島）での生活には十分慣れていた頃だったにもかかわらず、隔絶された離島での暮らしは驚きや戸惑いの連続で、何度かへこたれそうにもなった。だがそこでの生活こそが、自分にとっては「オセアニア」という世界を知るための重要な経験となった。

そもそもフーランガ島へのアクセスは非常に限られていて、必要物資を運ぶ首都スヴァからの定期船がおよそ1カ月に一度あるきりだ。周辺の島々へ帰省するフィジー人ら総勢約30人とともに、私はフェリーというのも名ばかりの小船サンディー号へ乗り込んだ。女性や子どもは船内の小部屋で雑魚寝をし、男性は甲板で寝た。皆で魚を獲って調理しながらの長旅だった。恒常的な船酔いと戦いながらやっとフーランガ島に着いたのは、スヴァを出てから4日が過ぎた夜だった。フェリーは環礁帯の浅瀬に入っていけないため沖合に泊め、村からのカヌーの迎えを待った。

電気も何もない真っ暗な村に、ぽつりぽつりと白い目が浮かんでいた光景を今でも思いだす。異邦人の到着に島民たちは明らかに戸惑ったが、首都に暮らすフーランガ島出身者から託された手紙を渡すと、2時間ほど待たされた後、首長の家へ通された。そこでカヴァ（嗜好飲料）の根や小麦粉、砂糖、タバコといった贈与品を差し出し、セヴセヴと呼ばれる入村儀礼を終えると、私は父ンブリと母ラコの5人目の子として、村へ迎え入れられることとなった。

フーランガ島は土地面積約18・5㎢、数時間もあればカヌーで一周できるほどの大きさで、三つの村がある。私が暮らしたナイヴィンダム村は、家屋数18戸、人口約80人、村人は摂取食物の8割近くを自給自足で賄うという生活をしていた。珊瑚礁島という土壌の悪さから育つ作物は限られていたが、主食のイモ類やその葉、果物、毎日海から獲ってくる魚介類などを食べて暮らした。

いわゆる「文明の利器」を欠いた生活に当初は大変苦しんだ。まず電気がない。暗闇の恐ろしさを学び、月の満ち欠けに敏感になり（満月の光は実に明るい）、

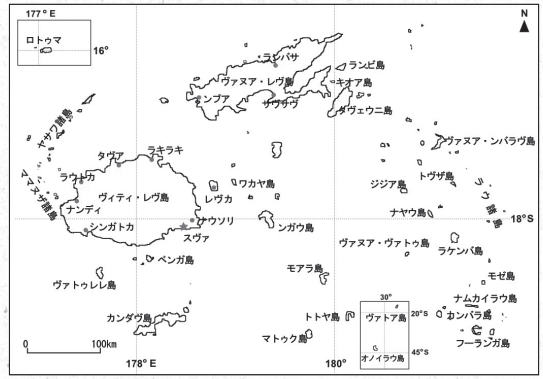

図1：フィジー地図。フーランガ島は南東の端にある。

図2：ナイヴィンダム村。海辺に18戸の家々が並ぶ。

図3：村には各所にこのような日よけスペースがあり、人びとが集まってくつろぐ。

図５：サメの調理風景。この日はスープになった。

図４：浜辺は風が心地よく、昼寝にちょうどよい。

図７：水不足の時期。砂で鍋の汚れを擦りとり、海水で砂を落とす。

図６：葬送儀礼の一環でブタを屠って食べた。ブタは男たちにとっての威信財だ。

太陽に従って行動する癖がついた。次に水がない。島内には川や池（淡水レンズ）もほぼなく、真水の入手は雨水に頼っていた。しかし乾季にはそれも不足し、雨水はもっぱら飲用に確保され、それ以外の洗濯や水浴び、食器洗いは全て海でおこなった。髪も衣服もいつも潮っぽく、湿気を帯びていた。電話線はおろか携帯電話の電波も通じていなかった。外部への連絡手段を一切持たないという不安は想像を上回るものだった。

離島におけるものの不足、与えあうという日常

電気や水に限らず、概して離島にはあらゆるものがない。ある朝、子どもたちが浜辺でビーチバレーのような遊びをしていたので、いったいそのバレーボールがどこから来たのだろうと不思議に思って近づいてみると、フグの膨らんだ胃（膨張嚢）をボールにしていたというのには、「なるほど」と大いに笑ってしまった。

この例のように、まず人々は限られた資源を最大活用する知恵に満ちている。今や南の島イメージに必ず登場するココヤシも、島での生活では飾りでもなんでもなく、根以外の全ての部位が活用される。例えば種子は水や油やココナッツミルクといった大変貴重な飲食物に、種子を覆う硬い殻は食器などに、繊維部分は縄に、大きな葉はゴザや籠や団扇などに、幹は木材などに利用される。

また物資の不足を補うべく、人々は日常的に与えあう。例えば村では通常の食事を世帯で賄うが、そこには必ずといって良いほど、隣近所からもらった食事が一品は加わる。食事時になると子どもたちが村内を練り歩き、食物をもらったり、渡したりする姿があちらこちらに見られる。このときおもしろいことに、「与える」と引き換えに何かを「もらう」ような、いわば物々交換という単純な形式は採られず、子どもたちは与えるためだけ、あるいはもらうためだけに、それぞれが家々を訪ねる。もちろん長期的にみれば、「交換」が成立していると分析することもできるが、その場において彼らがおこなっているのは「与える」ことであって、交換はいわば与えることの連鎖として結果的に生じているにすぎない（人類学ではこれを贈与交換とよぶ）。

図８：獲れた貝を運ぶため、ココヤシの葉をその場で編む。

海という境界？

このような与えあうというネットワークは、島内だけでなく、近隣他島とのあいだや本島の都市部に住む親族との間にも張りめぐらされている。だが、「与えあうことを通して人々が海を介したつながりを形成している」というと、聞こえは簡単だが、それはかなりの困難に満ちている。

フーランガ島で暮らし始めた当初、私は見渡す限りに広がるエメラルドグリーンの海が大好きだった。一歩海に入れば色とりどりの魚や珊瑚に囲まれ、色彩とはなんて美しいものだろうと感動した。村人たちは漁や、近隣島の訪問と、毎日そんな海へ向かう。ある早朝のことだった。いつもどおり「父」のンブリの漁についていこうとすると、その日は大きい魚を獲るために沖まで出るが、天候が悪くなりそうなので私は村に残るようにと言われた。しかし私は、沖合漁法をそろそろ覚えたいという思いのなか、ぜひ一緒に行きたいとお願いした。合計6人で沖まで出る途中、イルカの群れが通った。イルカの神の力を受けていると名高いサイレシという男性が海に飛びこんで鳴声を出すと、イルカたちは近づいてきて、しばらく私たちのボートと一緒に進んだ。まるで夢のような出来事だった。

しかしそれも束の間、ンブリの懸念どおり天候がどんどん悪化した。激しい雨が降りだし、3メートル先も見えないほ

図９：クリスマスから正月にかけての数週間は、村人全員で共食をおこなう。

どになった。波は高まり、バーン、バーンとボートに打ちつけ、あっという間にボートを水浸しにした。雷が間断なく鳴りはじめ、いよいよ恐ろしくなり、私は必死にボートの縁にしがみついて丸くなっていた。結局ンブリたちの航海技術と幸運とによって、無事に村まで帰り着いたものの、海に出るとは恐ろしい危険が伴うものだと学んだ。

小島での生活で身に沁みるのは、日常的にこのような海という「境界」を思い知らされることによる孤絶感だ。地続きであれば、「外」へはかならず歩いて辿り着ける。もちろん道中さまざまな困難もあるだろうし、移動距離は状況によって長短さまざまだろうが、少なくとも想像の上では、自分という身体があれば、必ず「ここ」は「外」へとつながっている。他方で海は決して身ひとつで渡ることができない。私自身、船がなければ絶対にここから出られないのだと思うと、なんとも苦しい気持ちになった。船があり海に出られたとしたって、前述のとおり、例えば嵐に見舞われ船から一歩でも投げ出されれば、ひとたまりもない。海はそれほどに、島の暮らしのなかで圧倒的な境界として機能する。

図10：沖へはこのような船外機付きボートで出ることがあるが、燃料不足で船外機を使えないことも多い。

オセアニア――「海で隔たれた島々」から「海でつながれた島々」へ

しかしながら、だからこそ、人々は海を境界としてではなく、「向こうへとつなぐ場所」として捉えずにはいられなかったのではないだろうか。オセアニアの人々は長きにかけてカヌーを作り、スターナヴィゲーションと呼ばれる航海技術を発達させ、歌や踊りを通して海洋生物の生態を示すような神話を伝承し、ときにはサイレシ氏のようにイルカになり、仲間との協力関係を築き、海を渡ることのできる場所として認識するための、技術や心性を築いてきた。フーランガ島の位置するラウ諸島では、島間の伝統的な贈与交換体系が今でも息づいており、前述のとおり、人々はかなり頻繁に海を渡る日常を過ごしている。贈与交換で交わされるのは必要物資だけではない。なんの変哲もないような木彫りやゴザや布などが与えあわれるのは、むしろ与えあうという行為を通じて、人々のつながりを構築するという目的からなのだ。

「オセアニア」の語源は、人間の住む居住世界「エクメネー」に対する、非居住世界としての「オケアヌス」にある。しかしオセアニアの人々にとって、もはやそれは行く手を遮る非居住世界などではない。彼らはそこを、渡り、生きる場所として形作ってきた。オセアニアという世界は、海（オーシャン）によってつながれた一体として理解されるときに初めて、そこに住まう人々の文化を見せてくれるのである。

図11：海の向こうには何があるのだろう。

太平洋芸術祭への誘い

とはいえど、読者にとって、例えばフーランガ島やラウ諸島はすぐに行ける場所ではないかもしれない。そこでオススメなのが、4年に1度開催される太平洋芸術祭（Festival of Pacific Arts）だ。多くが植民地経験を有するオセアニア諸国の文化復興や芸術の促進を目的として1972年に始まり、2016年には第12回目がグアムで開かれた（27の国／地域からの代表団が参加した）。2012年はソロモン諸島、その前の2008年はアメリカンサモアと、開催地はオセアニア諸国で巡回する。次回2020年はハワイで開催予定だ。

芸術祭はおおよそ2週間ほど続く。良くも悪くも見世物色が少なく、宣伝もほとんどされないため、日本での知名度は低いものの、連日連夜、オセアニアのさまざまな国からやってきた人々で大変な賑わいをみせる。見所は無数にあるが、各地から実際に航海してきた伝統的カヌー群を浜に迎え入れるという恒例の幕開けは、ぜひ行ってみてほしい。当然航海は危険に満ちており、今回はパラオからの参加者が1人、航海中に命を落としたことが連日グアムの新聞を騒がせた。しかしそれでもこの儀式をやめないのは、海を渡る航海こそが、まさに「オセアニア」という世界をつくりだす文化実践だとみなされているからである。

オセアニアが教えてくれる独特のつながりの世界。それはまた、オセアニアを超え、私たちが互いにつながりを希求しながら自然とともに生きるための、重要な示唆を与えてくれる。トンガ出身で、フィジーに最後の居を構えた思想家エペリ・ハウオファ（1939～2009）の有名な一説を引用して、このエッセイを閉じたい。

> 「……」海とはわれわれのあいだを、そしてすべての人をつなぐ道であり、海とはわれわれの終わりなき冒険譚（サーガ）であり、海とはわれわれが有しうるもっともパワフルなメタファーなのだ。海（オーシャン）は、われわれの内にある。
>
> [Hau'ofa 2008: 58]

【引用文献】

Hau'ofa, Epeli (2008). *We Are the Ocean: Selected Works*. Honolulu: University of Hawai'i Press.